

首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション

永野マドセン, 泰子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

35

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2011-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012511>

首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション

永野マドセン泰子

キーワード

首里方言、イントネーション、アクセント句、法接尾辞、通常疑問文、疑問詞疑問文、係り結びによる強調疑問文

要 旨

琉球方言の特徴の一つとして、疑問法が複雑で、本土方言と異なる点があげられる。本稿では首里方言における疑問の法接尾辞「+ミ」(通常疑問文)、「+ガ」(疑問詞疑問文)および「+ラ」(係り結びの強調疑問文)を含む発話のイントネーションを調べた。その結果、これらの接尾辞を含む動詞は、叙実の法接尾辞「+ン」や「+ル」を含む語と同一のイントネーション形を持ち、法接尾辞まで含めて語としてのアクセント型をとることが明らかにされた。したがって、疑問の法接尾辞「+ミ」「+ガ」「+ラ」は下降型の語の場合は低く、平板型の場合は高く平らに実現される。しかし疑問詞や係助詞に直続する場合には動詞のアクセントが消滅する発話となり、いずれのアクセント型でも低く平らに実現される。標準語では疑問文の種類に関わらず文末に終助詞の「の」や「か」を付加し、いずれも上昇調のイントネーションで発話される点で、大きく異なる。

1. はじめに

首里方言をはじめとする琉球方言の特徴のひとつとして、疑問法が標準語などの本土方言と異なることがあげられる。本土方言では、動詞や形容詞が語根と時制辞だけで成立するが、琉球方言の場合は、それに続く法接尾辞が語を完結するために必要となる。法接尾辞により平叙文と疑問文が、さらには通常疑問文と疑問詞疑問文、また強調の疑問文が区別される。強調の場合は法接尾辞に対応する係り助詞が先行する。つまり琉球方言においては、形態による法の指定が本土方言よりはるかに厳密なのである。標準語においては、疑問や強調という発話の機能はイントネーションによって担われる部分が大きいことが知られているが、首里方言ではイントネーションはどのように疑問法の文法形態と対応するのであろうか。本稿では首里方言における疑問法のなかで、「+ミ」「+ガ」および「+ラ」の疑問の法接尾辞を持つ文についてイントネーションとの対応を調べた。比較のため、標準語のイントネーションも必要に応じて提示した。

なお本稿では、発話の基本周波数をイントネーションと定義している。また「アクセ

ント句」を Pierrehumbert & Beckman (1988) に従い実際のイントネーションに基づいた単位と定義する。例えば下降型アクセントを持つ2つの句が連続する場合、それぞれに句頭の上昇、およびアクセントの下降が見られる場合「2つのアクセント句」とし、後続の句のアクセントが消滅して句立て、ピッチの下降も1つしか観察されない場合は「1つのアクセント句」と数える。

2. 首里方言にみる法接尾辞

首里方言の「法」については宮良（2000：91－169）に詳しいので、以下はそれをまとめたものである。

標準語の「着＋る」や「着＋た」では動詞の語根「着」に時制辞「る」（非過去）や「た」（過去）が付いたもので、それで語として完結している。しかし単文においては、首里方言の動詞形ではそれらに法接尾辞を加えて初めて語として完結する。

- | | | |
|-----|-----------|----|
| (1) | イ. チ＋ユ＋ン | 着る |
| | ロ. チ＋チャ＋ン | 着た |

これらの語は語根「チ」＜着＞＋時制接尾辞「＋ユ」（非過去）あるいは「＋チャ」（過去）＋叙述の法接尾辞「＋ン」という3つの形態素からなる構造を持ち、「チ＋ユ」や「チ＋チャ」だけでは語として完結せず、非文法的である。首里方言の法接尾辞の主なものには以下がある。

a. 叙実法

「＋ン」 直説（叙実）法

「＋ル」 非直説（係り結びの叙実）法

b. 疑問法

「＋ミ」 通常疑問文

「＋ガ」 疑問詞疑問文

「＋ラ」 係り結びによる強調の通常疑問文、強調の疑問詞疑問文

先の「着る」を例にとると以下のようになる。

- | | | |
|-----|---------------------------------|-------------|
| (2) | イ. チユン。 | 着る。 |
| | ロ. イヤーガド <u>ユ</u> チユ <u>ル</u> 。 | おまえが（強調）着る。 |
| | ハ. チユ <u>ミ</u> ？ | 着る（の）？ |

- ニ. アカウ' ージン チュミ? 赤地芭蕉布の着物を着るの?
 ホ. アカウ' ージンガ チュラ? 赤地芭蕉布の着物(強調)を着るのか?
 ヘ. ヌー チュガ? 何を着るの?
 ト. ヌーガ チュラ? 何を(強調)着るのか?

平叙文では、接尾辞の「+ン」「+ル」が最も基本的であり、叙実法をあらわす「+ン」の他には「+ンドー」や「+サ」などがある。「+サ」は断定的な意味合いというよりは、軽いタッチの肯定をあらわす。(ロ)では文中の句が係り助詞「ドウ」によって強調されており、係り結び構文として法接尾辞の「+ル」を取る。(ハ)や(ニ)のような通常疑問文の場合は「+ミ」を取るが(ニ)では標準語の「(着物)を」にあたる助詞がないことに注意。(ホ)は「アカウ' ージン」が係り助詞「+ガ」によって強調される通常疑問文であり、この場合は係り助詞に対応する法接尾辞の「+ラ」を取る。(ヘ)のような疑問詞を含む疑問文では「+ガ」を取るが、疑問詞が係り助詞「+ガ」によって強調された文になると、法接尾辞は「+ガ」ではなく「+ラ」を取る。つまり疑問詞よりも係り助詞の方が優先されるのである。このように首里方言における疑問法は極めて複雑であり形式により規定されている。標準語では疑問文の種類に関わらず終助詞の「か」や「の」を文末に付けることにより疑問文とすることができ点が首里方言とは大きく異なる。ただし、法接尾辞による疑問形が最も基本的である首里方言でも、叙実形の末尾に疑問の終助詞「ナー」をつけて疑問形にすることは可能である。例えば「ヌムミ?」(飲む?)は聞き手に Yes/No の答えを求める純然たる通常疑問文に、「ヌムン ナー?」は控えめな確認のための疑問文に使われるようである。この場合は叙実法の「+ン」の機能はキャンセルされたと解釈できる。

3. 調査票、話者、および録音

首里方言における「法」と対応するイントネーション分析のために、宮良(2000:91-169)に基づく調査票を作成した。話者は自他共に典型的な首里方言話者と認める首里市内に在住の60代の男性であり、録音は話者の自宅で2007・8年に行われた。イントネーション図の説明には「話者A」と記載した。また、科研費重点領域研究「日本語音声」CDには適格に選ばれた疑問文項目があり典型的な方言話者により録音されている。本稿では「日本語音声」CDに含まれる首里方言(女性話者)の録音も使用した。図には「話者B」と記載した。琉球方言のように消滅の危機に瀕した言語では、典型的な話者の確保が本土方言とは比較にならないほど難しい。この点で「日本語音声」CDに含まれるいくつかの琉球方言の録音や「首里那覇音声データベース」の存在は極めて貴重である。なお、比較を容易にするため必要に応じて東京方言のイントネーションも同じく「日本

語音声」CDの録音（男性話者）を使用した。この発話例の図には「話者 C」と記載した。音声分析には SUGI Speech Analyzer を使用した。

4. 通常疑問文

4.1 首里方言のアクセント

首里方言は平板型と下降型の2つのアクセント型をもつ。有核型、無核型と呼ばれることもあるが、本稿ではより広く使用されている下降型、平板型の名称を使い、必要に応じて前者を（1）、後者を（0）で表す。東京方言では下降の位置が弁別的であり、拍数が増えるとアクセントの型も $n+1$ （ n 音節の語には $n+1$ のアクセント型がある）のように増加するが、首里方言ではアクセントの位置は最初から2拍目に固定されている（ただし2拍語のときは1拍目）。聴覚的には語頭から HHL となる。なお平板型アクセントを取る語では最後の拍のピッチが高く発話されることがあるが、これは名詞も含めて首里方言の平板型の語全般にみられる現象であり（永野マドセン・狩俣 2009）、法接尾辞の機能とは無関係と思われる。

4.2 動詞だけによる疑問文

下降型（1）の語「ヌン」（乗る）と平板型（0）の語「ヌムン」（飲む）についてそれぞれ疑問と叙述（ここでは法接尾辞「サ」）のイントネーションを図1、2に示した。

- | | | |
|-----|--------------|------|
| (3) | イ. ヌイミ (1) ? | 乗る? |
| | ロ. ヌイサ (1) 。 | 乗るよ。 |
| | ハ. ヌムミ (0) ? | 飲む? |
| | ニ. ヌムサ (0) 。 | 飲むよ。 |

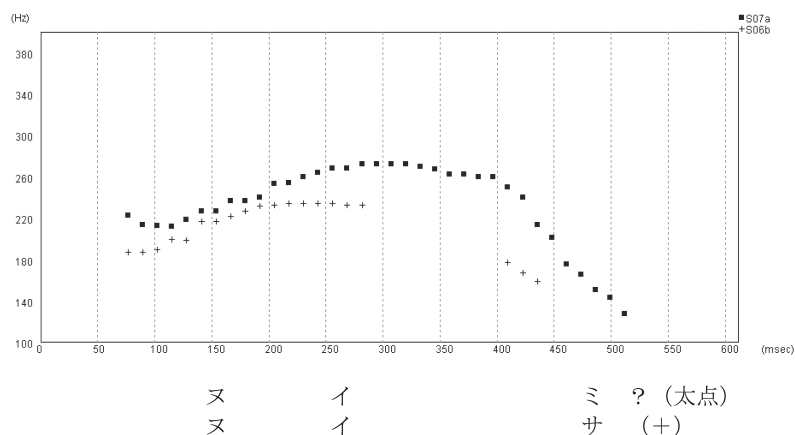


図1 下降型アクセントを持つ「ヌイミ？」（乗る？）（太点）と「ヌイサ。」（乗るよ。（+）のイントネーション。話者 B。

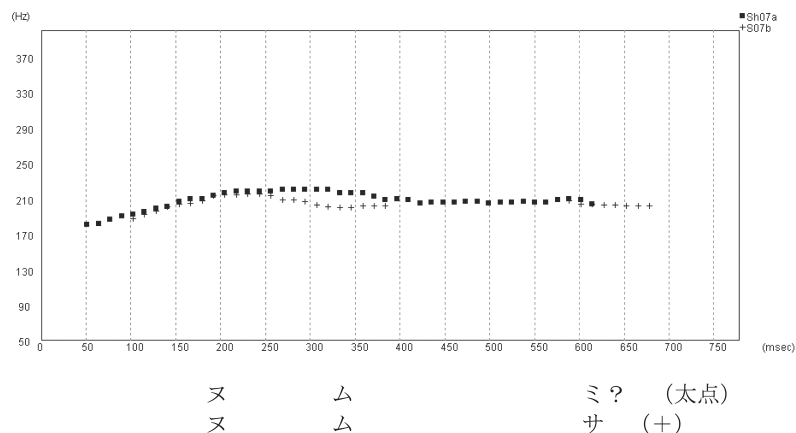


図2 平板型アクセントを持つ「ヌムミ?」(飲む?)(太点)と「ヌムサ。」(飲むよ。)(+)のイントネーション。話者 B。

図1と2で明らかなように、疑問の法接尾辞「+ミ」で動詞が完結する場合も、非疑問の法接尾辞「+サ」で完結する場合も、共にその動詞のアクセント型（下降型あるいは平板型）をとっている。「サ」は軽く発話されるので、下降度はやや少ないが、「ヌイミ?」(乗る?)「ヌイサ。」(乗るよ。)のイントネーションが共に下降型をとることに違いはない。平板型の「ヌムミ?」(飲む?)と「ヌムサ。」(飲むよ。)のイントネーションは共にやや高いピッチ領域で平らに実現されており、両者に違いはみられない。要するに、動詞のアクセント型がそのまま実現するのである。

比較のために、標準語における動詞単文の疑問文イントネーションを提示する。図3と4は標準語における下降型アクセントの動詞「飲む?」「飲む。」と平板型の動詞「乗る?」「乗る。」のイントネーションである。なお標準語と首里方言では「乗る」「飲む」のアクセント型が反対になっている。

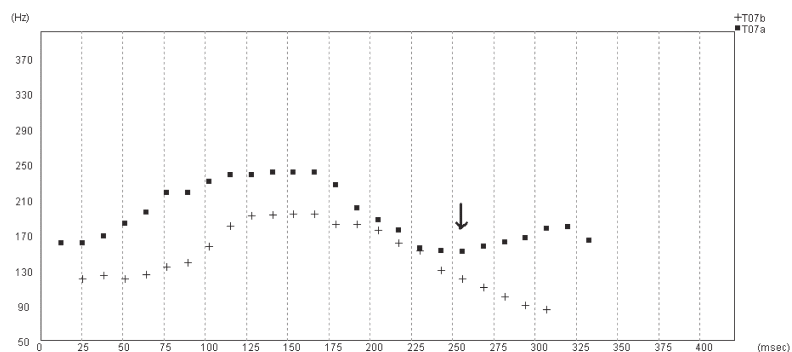


図3 標準語の下降型アクセントを持つ動詞「飲む?」(太点)と「飲む。」(+)のイントネーション。話者 C。矢印は /nomu/ における /m/ と /u/ の境界を指す。

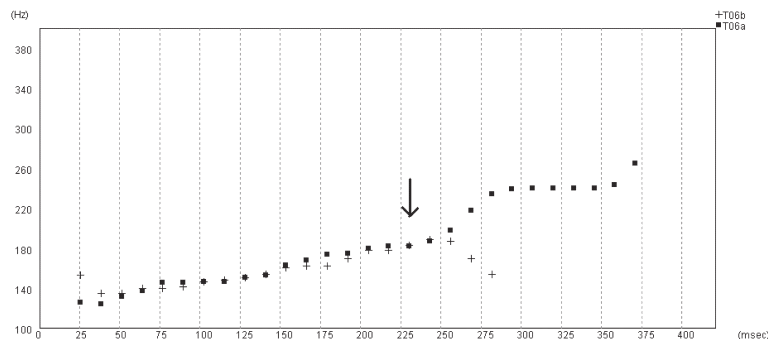


図4 標準語の平板型アクセントを持つ動詞「乗る？」(太点)と「乗る。」(+)のイントネーション。話者C。矢印は /noru/ における /r/ の始点を指す。

標準語においては、動詞一語で疑問文を作る場合、下降型アクセントの語では完全に下降せず、途中から上昇に転ずる。平板型の語では、語頭からすでに上昇が始まり、最後の拍で上昇がさらに高まる。いずれも、語(文)末が上昇する。また語(文)末に疑問の終助詞「の」や「か」が付いた場合も同じく上昇調となる。反して首里方言では、疑問の法接尾辞「+ミ」が付いても動詞のアクセント型をとり、下降型は低く、平板型では高く平らに終わる。以上のことから、首里方言の通常疑問文のイントネーションは標準語のような上昇調という概念では把握できず、アクセント型に言及する必要があることがわかる。

なお、首里方言でも標準語でも下降型アクセントを持つ語の疑問形のイントネーションは一貫して高いピッチ領域で発話されている。標準語の先行研究(永野マドセン・鮎澤 2011)でも同様の観察が統計的に有意の差をもって報告されている。

4.3 その他の通常疑問文

ここでは動詞一語文より長い通常疑問文を見てみる。まず(イ)は叙実文、(ロ)は通常疑問文である。一方(ハ)にみる「ヌーガナ」(何か)は疑問詞「ヌー」と接尾辞「+ガナ」から造られているが品詞は不定代名詞となり「何か欲しい?」では答えが yes/no になるので、通常疑問文であり、法接尾辞は「+ミ」を取っている。

- (4) イ. マナミガ (0) イチュン (1) 。 真奈美が行く。
 ロ. マナミユ (0) イチュミ (1) ? 真奈美は行くの?
 ハ. ヌーガナ (1) フサミ (0) ? 何か欲しい?

各文のイントネーションを図5から7に提示する。(イ)は平板型の「マナミガ」に下降型の動詞「イチュン」が新しい句立てをすることなく連結し、文末にはピッチの下降

が観察される。(ロ)の疑問文にみる「ヤ」は主格ではなく、主題をあらわす副助詞である。この文では「イチュミ？」(1)を際立たせた発話になっており、語頭の句立、アクセントの下降ともはっきりと実現されている。図1の下降型動詞一語による疑問文と基本的には同じイントネーションが観察される。同様に(ハ)でも平板型アクセントを持つ動詞の疑問形「フサミ？」が高いピッチ領域で実現されて、図2にみる平板型動詞の一語文と同様のイントネーションが観察される。(ロ)と(ハ)では二つのアクセント句として発話されている、ともいえる。

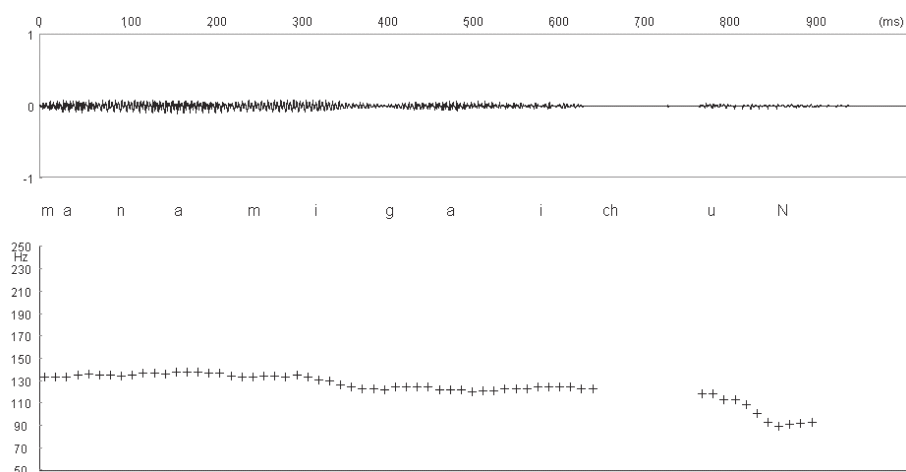


図5 「マナミガ イチュン。」(真奈美が行く。)の音声波形とイントネーション。話者A。

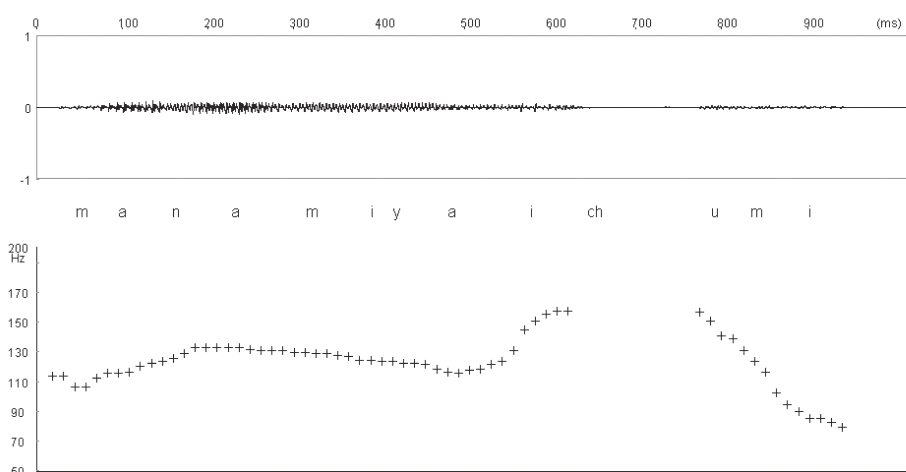


図6 「マナミヤ イチュミ？」(真奈美は行くの?)の音声波形とイントネーション。話者A。

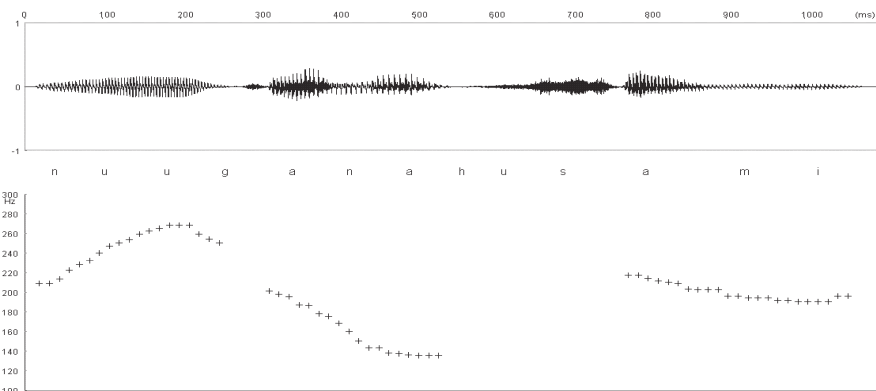


図7 「ヌーガナフサミ？」（何か欲しい？）の音声波形とイントネーション。話者 B。

5. 疑問詞疑問文

首里方言には「ター」（誰）、「ヌー」（何）、「マー」（どこ）、「イチ」（いつ）、「ジル」（どれ）、「チャヌ」（どの）などの疑問詞があるが、これらを含む述語動詞の法接尾辞は「ガ」となる。

5.1 疑問詞＋動詞からなる疑問詞疑問文

- (5) イ. ターガ (1) イチュガ (1) ? 誰が行くの？
 ロ. ヌー (0) フサガ (0) ? 何が欲しい？

(イ) と (ロ) についてそのイントネーションを図8と9に提示する。図8の「ターガイチュガ？」（誰が行くの？）では下降型の語が二つ続くが、「ターガ」にみられるピッチの下降の後にはピッチが低く平らに続き、後続の下降型動詞「イチュガ」には語頭の句立てもアクセントの下降も観察されず、アクセントが完全に消滅していることがわかる。図9の「ヌー フサガ？」（何が欲しい？）では平板型の語が二つ続くが、後続の「フサガ」は新しい句立てがなく低く平らに付く。このことから、どちらの文でも述語動詞は独立する単位を作らず、一文で一つのアクセント句として発話されていることがわかる。つまり「ターガ イチュガ？」や「ヌー フサガ？」のような疑問詞疑問文ではイントネーションにおけるフォーカスは「誰」「何」などの疑問詞に置かれ、それに続く述語動詞のアクセントを消去することにより、先行の疑問詞を際立たせる役目をしているのである。図7で取り上げた「ヌーガナ フサミ」（何か欲しい？）が2つのアクセント句として発話され動詞のアクセント型で完結するのと対比をなす。

「何がある？」「何かある？」にみるような疑問詞疑問文と通常疑問文の比較は、プロ

プロジェクト「日本語音声」（日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究）（Sugito 1994）で使用された項目の一つで、標準語や無アクセント方言である福井と熊本についても、両方言が2種類の疑問文をイントネーション単位の数で区別すると報告されている（Maekawa 1991, 前川 1997）。首里方言においてもイントネーション単位で両文を区別する点では同様である。ただし標準語では両文とも末尾が上昇調になるのに対して、首里方言の通常疑問文ではアクセント型に言及する必要がある。

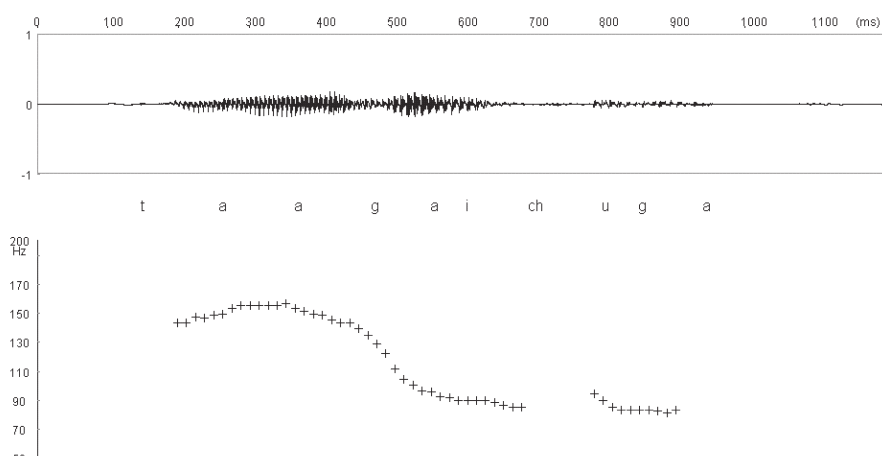


図8 「ターガ イチュガ？」（誰が行くの？）の音声波形とイントネーション。話者 A。

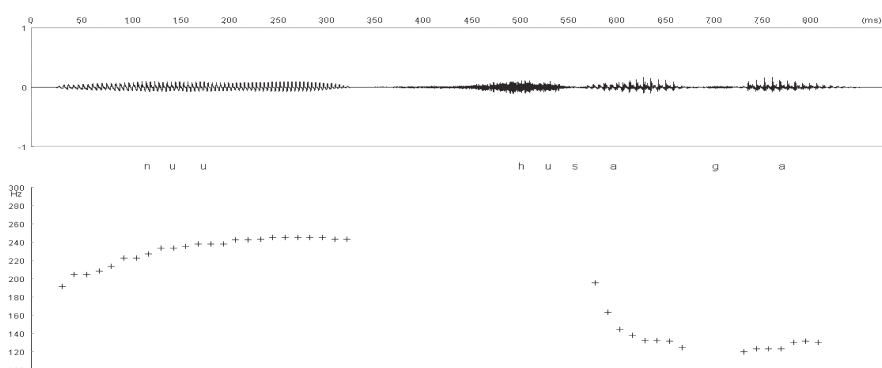


図9 「ヌー フサガ？」（何が欲しい？）の音声波形とイントネーション。話者 B。

5.2 複雑な疑問詞疑問文

しかし疑問詞疑問文で常に後続の述語アクセントが消去される訳ではない。以下の文を検討してみよう。

(6) イ. タート (1) キョート (0) ンカイ (1) ウンジャダ (1) ?

誰と京都へ行ったの？

ロ. キョート (0) ンカイ (1) タート (1) マジュン (1) ウンジャガダ (1) ?

京都へ誰と行ったの？

両文のイントネーションを図 10, 11 に示す。(イ)と(ロ)の文では疑問詞の「ター(ト)」(誰と)と述語動詞の「ウンジャガ」(「行く」の過去形)の間にそれぞれ「キョートンカイ」(京都へ)、「マジュン」(一緒に)の句が挿入されている。これらの句とそれに続く述語動詞には共に語頭の句立てとアクセントの下降があり、独立したアクセント句として発話されていることがわかる。つまり、これらの文では述語動詞のアクセントは消去されていない。

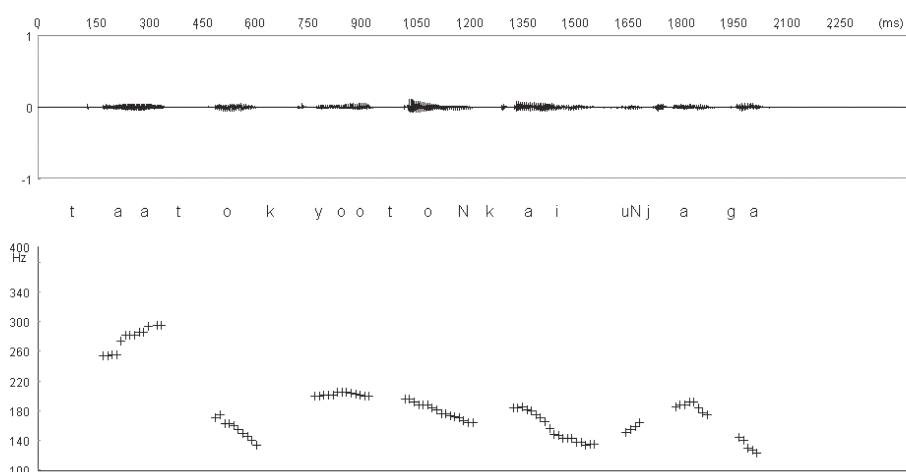


図 10 「タート キョートンカイ ウンジャガ？」(誰と京都へ行ったの?)の音声波形とイントネーション。話者 B。

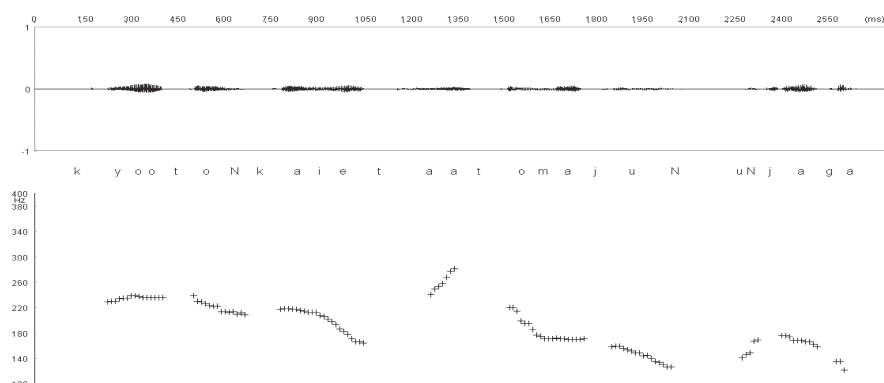


図 11 「キョートンカイ タート マジュン ウンジャガ？」(京都へ誰と行ったの?)の音声波形とイントネーション。話者 B。

5.3 複雑な構文構造を持つ疑問詞疑問文

さらに複雑な以下の文をみてみよう。

(7) イ．ターガ (1) イチュン (1) ディ マナミヤ (0) イチョーガ (1) ?

誰が行くと真奈美は言ってるの？

ロ．マナミガ (0) イチュン (1) ディ ターガ (1) イチョーガ (1) ?

真奈美が行くと誰が言ってるの？

両文にみる「(ン) ディ」(と)は補文標示の形式である。(イ)では、疑問詞は「ターガ イチュン」(誰が行く)という補文内にあらわれているが、それを認可する働きをもっている疑問の法接尾辞「+ガ」は、補文動詞の末尾ではなく、主節動詞の末尾にあらわれている。(ロ)では疑問詞が主節の主語の位置にあらわれていて、それを認可する法接尾辞「+ガ」も主節動詞の末尾にあらわれている。

図 12 では、「ターガ」に続く下降型動詞「イチュン」のアクセントが完全に消滅しピッチが低く平らに続いている。反して、主節動詞である末尾の「イチョーガ」には語頭の句立てもアクセントの下降も実現されている。このことから、アクセントが消去されるのは、法接尾辞の如何に関わらず疑問詞に直続する動詞、この場合は叙実法の接尾辞をもつ「イチュン」であることがわかる。図 13 では主節動詞が疑問詞に直続しており、「ターガ」にみるアクセントの下降のあとでは「イチョーガ」のアクセントが完全に消滅し、低く平らに続いている。

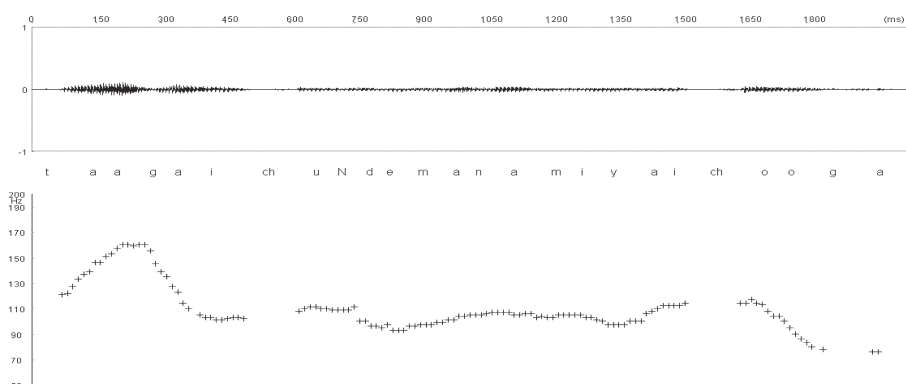


図 12 「ターガ イチュン ディ マナミヤ イチョーガ？」(誰が行くと真奈美は言ってるの?) の音声波形とイントネーション。話者 A。

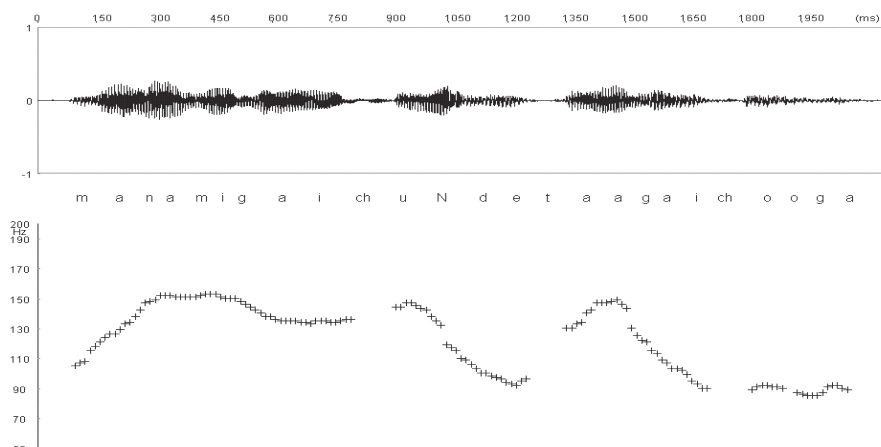


図 13 「マナミガ イチュン ディ ターガ イチョーガ？」（真奈美が行くと誰が言ってるの？）の音声波形とイントネーション。話者 A。

6. 係り結びによる強調疑問文

係り結びは、古典語で使われた強調用法の文法規則で、該当する句や節に係り助詞を付け、述部動詞の活用形がそれに呼応して特定の活用形で結ばれる、というものである。具体的には、「ぞ」「なむ」「や」「か」に対しては結びが連体形、「こそ」に対しては結びが已然形を取る。係り結びの法則は室町時代に消滅したといわれているが、宮良（2000：125）によるとその用法の一部が首里方言をはじめとする琉球方言に残っている。ここでは係り結びによる通常疑問文と強調疑問文のイントネーションを考察する。このような強調の疑問文に対応するものは標準語にはない。宮良（2000：130）によれば、係り結びの強調疑問文は、基本的には聞き手に間接的に問いかけているが、その問いかけを自分自身にも向けている。それで、聞き手がない状況でもその発話が可能とのことである。

6.1 強調の通常疑問文

(8) では係り助詞「ル」を含み法接尾辞「＋ル」で受ける強意の叙実文と係り助詞「ガ」を含み強意の通常疑問文の法接尾辞「＋ラ」で受ける文を比較してみよう。なお係り助詞「ドゥ」や「ル」は平叙文に、「ガ」は疑問文に用いられる。(8) ではそれぞれ「マナミガ」(真奈美が)、「(ナーファ) ンカイ」((那覇) へ) が強調されている。図 15、16 に見るように、これらの文のイントネーションではいずれも係り助詞を含む句が強調され、その後の発話は低いピッチ領域に抑えられはっきりしたアクセントの句立てやピッチの下降が観察されない。これは、フォーカスの置かれる疑問詞に直続する動詞のアクセントが消滅するのと同様の現象と考えられる。

(8) イ．マナミガ (0) ル ワッサン (0) ディ イラットール (1)。

真奈美が(強調)悪いと言われている。

ロ．マナミヤ (0) ナーファ (0) ンカイ (1) ガ イチュラ (1) ？

真奈美は那覇へ(強調)行くのか？

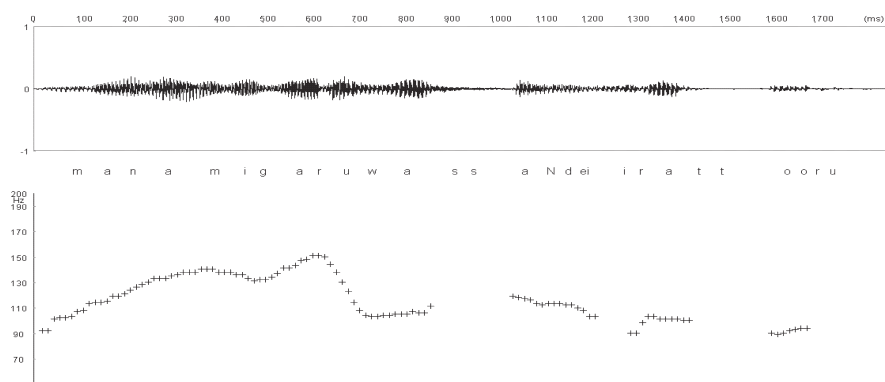


図 14 「マナミガル ワッサン ディ イラットール。」(真奈美が(強調)悪いと言われている。)の音声波形とイントネーション。話者 A。

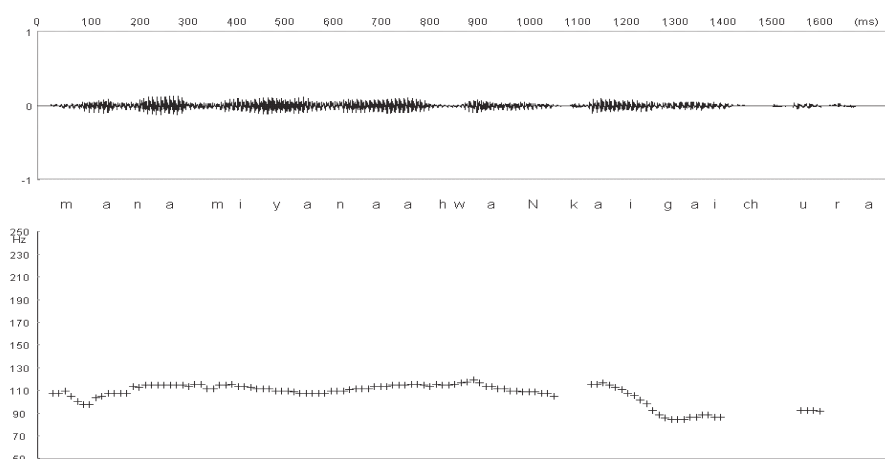


図 15 「マナミヤ ナーファンカイガ イチュラ？」(真奈美は那覇へ(強調)行くのか?)の音声波形とイントネーション。話者 A。

6.2 強調の疑問詞疑問文

疑問詞からなる名詞句に対して、強調の意をもつ係り助詞「+ガ」が付与されると「ターガガ」(一体誰が)、「ヌーガ」(一体何を)のような強意の疑問詞疑問文ができるが、その場合には結びの法接尾辞「+ラ」の生起が必要となる。(6)の(イ)は疑問詞「タ

一) (誰) に格助詞「ガ」が付いたもの、(ハ) も「マー」(どこ) に助詞「ンカイ」(へ) が付いたものである。疑問詞を受けるために述語動詞の法接尾辞は「+ガ」となっている。しかし(ロ) と(ニ) はそれらに係り助詞「+ガ」が付加したもので、この場合は述語動詞の法接尾辞「+ラ」の生起が必要である。つまり、これらの文では述語動詞の法接尾辞は疑問詞ではなく係り助詞に対応しているのである。

- | | |
|--|-----------|
| (9) イ. <u>ター</u> ガ (1) イ <u>チュ</u> ガ (1) ? | 誰が行くの? |
| ロ. ターガ (1) <u>ガ</u> イ <u>チュ</u> ラ (1) ? | 一体誰が行くの? |
| ハ. <u>マー</u> (0) <u>ン</u> カイ (1) イ <u>チュ</u> ガ (1) ? | どこへ行くの? |
| ニ. マー (0) <u>ン</u> カイ (1) <u>ガ</u> イ <u>チュ</u> ラ (1) ? | 一体どこへ行くの? |

図 16 は (イ) と (ロ) のイントネーションを比較したものである。(イ) では下降型アクセントを持つ疑問詞「ター」が強調され、(ロ) では「ター」に続く格助詞「+ガ」のピッチがより強調される発話となっている。強調されているのは係り助詞ではなく、先行する格助詞である。いずれの場合も後続の述語動詞「イチュガ」や「イチュミ」の持つ下降型アクセントは完全に消滅しており、係助詞が付加しても上記 5.2 の単文の疑問詞疑問文と同様に後続アクセントを消滅させることがわかる。

図 17 は (ハ) と (ニ) のイントネーションを比較したものである。通常の疑問詞疑問文である (ハ) の「マーンカイ イチュガ?」では、疑問詞を含む「マーンカイ」(どこへ) がイントネーションによって強調され、同時に後続の動詞「イチュガ」ではアクセントの下降が完全に消滅している。(ニ) にみる係り助詞が付加した発話では (ロ) と同様に、先行する助詞「ンカイ」の「カイ」にイントネーションのピークが置かれ、係り助詞の「ガ」でピッチが下がる。そして後続の動詞のアクセントの下降も完全に消滅している。以上のことから、係り助詞により強調された疑問詞疑問文は、もともとの疑問詞による強調(後続動詞のアクセントの消滅を含む)に係り助詞による強調が加わった極めて強調度の高いイントネーションとなることが解る。また、イントネーションによって強調されているのは係り助詞に先行する助詞であり、係り助詞ではない。

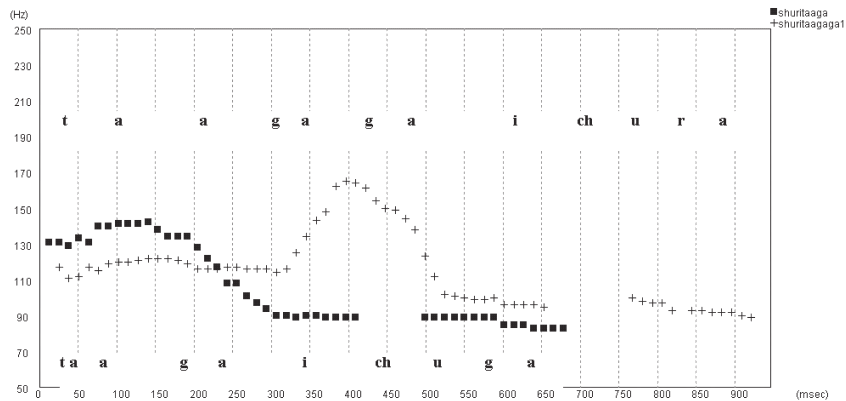


図 16 「ターガ イチュガ?」(誰が行くの?)(太線)と「ターガガ イチュラ?」(一体誰が行くのか?)(+)のイントネーションの比較。話者 A。

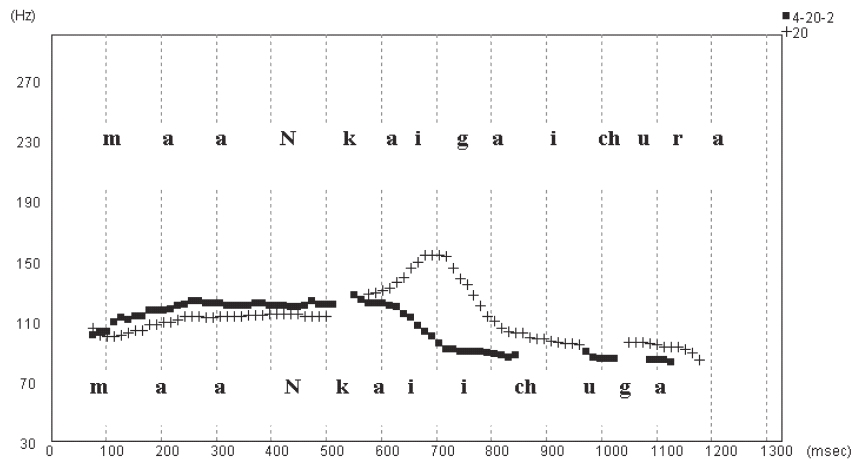


図 17 「マーンカイ イチュガ?」(どこへ行くの?)(太点)と「マーンカイガ イチュラ?」(一体どこへ行くの?)(+)のイントネーションの比較。話者 A。

7. まとめと今後の展望

首里方言における疑問の法接尾辞には「+ミ」「+ガ」「+ラ」があるが、いずれも法接尾辞まで含めてその動詞や形容詞のアクセント型をとる。ただし疑問詞が先行する場合、それに直続する動詞のアクセントは完全に消滅し、下降型、平板型、ともに低く平らに実現される。係り助詞が付加された強調の疑問詞疑問文でも、同様に直続の動詞のアクセントは消滅する。より複雑な構文構造を持つ文で、主節動詞が疑問詞に直続しない場合は動詞のアクセント型が実現される。強調の係り助詞を含む平叙文、通常疑問文でも係り助詞を含む句のあとでは動詞のアクセントが消滅し、先行の句を強調する発話となる。

首里方言にみる疑問法は法接尾辞により厳密に規定されている点で標準語と大きく異なる。標準語では、通常疑問文、疑問詞疑問文ともに文末に疑問の終助詞「の」や「か」が付加され、上昇調の末尾イントネーションをとることが知られている。首里方言の疑問文においてはアクセント型を認識することが重要で、標準語のように上昇調（あるいは下降調）で捕らえようとすると混乱する。

今後は異なる手法の調査、例えば実際の対話においてよりやさしく、あるいは丁寧に質問する場合にも今回と同様の知見が得られるのか見てゆきたい。また係り助詞を含む文でより複雑な構文構造を持つ文のイントネーションについても今後の課題としたい。

参考文献

- 永野マドセン泰子・鮎澤孝子（2011）「日本語における感情表現とイントネーション」『音声文法 I』くろしお出版
- 永野マドセン泰子・狩俣繁久（2009）「首里方言アクセントの音声学的実態」『琉球の方言』33号65-86，法政大学沖縄文化研究所
- 前川喜久雄（1997）「アクセントとイントネーション，－アクセントのない地域－」『諸方言のアクセントとイントネーション』，97-122，三省堂
- 宮良信詳（2000）『うちなーぐち講座、首里ことばのしくみ』，オキナワタイムス社
- Maekawa, Kikuo (1991) Perception of intonational characteristics of WH and NON-WH questions in Tokyo Japanese. *Proceedings of the 12th International Congress of Phonetic Sciences, Aix-en Provence, Vol.4.*
- Pierrehumbert, Janet and Mary E. Beckman (1988) *Japanese tone structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Sugito, Miyoko. (1994) 'An overview of studies on Japanese prosody'. *The Study of Sounds* 23, 227-271.